

最優秀賞

小学生部門

本宮市立本宮小学校 6年

佐藤 奨真

## 米粒一つを大切に

ひいおばあちゃんが倒れた。いつも明るくて元気で、この前は一緒にテレビですもうを観戦して、好きな力士が勝つと大きく拍手していたのに。

病院に着くと、顔は真っ白で手足が細くなったひいおばあちゃんがベッドにいた。何度も話しかけたのに、言葉は何一つ返ってこなかった。こんなことになるなんて信じられなかった。そのとき、もつと優しくしてあげれば良かったと心から思った。

この細くなってしまった体。でもこの体でひいおばあちゃんはその戦争の時代を耐えてくぐり抜けてきたのだ。いつも聞かされたのは戦争で多くの若い命が消えていったこと、その中には親戚の人もいたこと。墓参りの時に墓の一つ一つについて一生懸命に話をしてくれたこともあった。ひいおばあちゃんの口ぐせは「米粒一つでもだいじにしるよ」だった。僕が、ご飯を残すと必ず言われた。言われると、「うるさいなあ」と思ったことが何回もあった。でも、社会科の勉強や戦争体験者の方の話を聞いたり、テレビや映画で戦争の場面を見たりすると、「米粒一つの大切さ」の意味がすこしずつ分かるようになってきた。

みんなが生きたかったのだ。親は子の命を守り育てるために、一生懸命生きぬいてきたのだ。そのためには「米粒一つ」を大切にしていって、明日はどうなるかわからない時代を過ごしてきたのだ。

確かに、ひいおばあちゃんのお椀はいつもきれいだ。米粒が残っていなかった。そしてご飯を食べるときの顔はいつもうまそうに微笑んでは口をもぐもぐさせていた。小さいとき、ご飯の湯気の向こうにいるひいおばあちゃんの顔を見るとなぜかほっとした。

ひいおばあちゃんが米粒一つを大切にしていたから、僕がこの世界にいるのだ。ひいおばあちゃんから教えてもらったことを僕は大事にするよ。